

短編小説 『バスと妻』 whitecaps

###

男はその時バスに乗っていた。

外はもう夕闇に包まれて、太陽は地平線の下。バスの中だけが照明で明るく、バスの外の景色は電灯が点々と見えるだけでもうはつきりとしなない。バスの中は買い物帰りとおもわれるスーパーのビニール袋を持ったおばさんや、学校の帰りと見られる女子学生、スーツを着た会社員風の若者が、その男が座っている後部座席から見えた。そして前のほうには男と同じような年配のおじさんも乗っていた。バスの先頭の電光掲示板には、バス停の名前がオレンジ色で表示されている。——男

は囲碁サークルの活動からの帰り道だった。

男の名は澄田修司。4ヶ月前に定年を迎え会社を寿退社し、これから待たせらるう長い余暇生活をどうしようか考えている時期だ。修司の老後の計画は完璧、なはずだった。退職する前から趣味の囲碁や釣りをとことんやり詰めるつもりで、退職後すぐに町内の老人会の囲碁サークルに入った。また、仕事がなくなつて余つた時間を使って、本屋でたくさん買つてきた釣りの指南書を読みふけるつもりだった。自分なら絶対にこの余暇時間を無駄にしない、と修司はメリハリのきいた生活をするように心に決めていた。

しかし、実際仕事がなくなると、ついつい修司はボーツとしたり、テレビを見て過ごしがちにな

り、また、徐々に古いも意識するようになっていた。家の二階からの階段を下りるのが危なく感じるようになってきたり、髪に白髪が交じる、昨日の夕食の献立のようなちよつとしたことをすぐに忘れてたり、近所の子供に「おじいちゃん」と呼ばれたりすることもあった。また、老化ではないものの、仕事を辞めると手帳に書き込むことが何もなくなくなり手帳は空白だらけで、そして老眼のせいで昔自分が手帳に書いた小さな文字でさえ読みづらくなっていた。買ってきた釣りの本も机の上に残り積み重ねられ、このままではいけないと思っていたところに入った老人会の囲碁サークルでも、同じサークルの仲間との人間関係の軋轢で、悶々としたものを抱いていた。

囲碁サークルは老人会の活動の一つで、地域の公

民館が主な活動場所だ。サークルの長たるリーダーは北江さんといったが、この北江さんはとかくやる気がなかった。親しい仲間内のごく少人数で活動をし、外部から人が入って来たり、何かイベントを催したりするには否定的だったのだ。大抵いつも少人数でただ暇なときに囲碁を打つだけ、という活動だった。修司は、確かにそれも悪くない、でもそれだけじゃつまらないだろう、と常日頃から思っていた。修司がサークルにはいると言ったときも、北江さんは嫌な顔こそしなかったものの、入会関連の書類の処理は遅延して、修司のほうから何度も突っついてようやく受理されたほどだった。修司はサークルに入った後、活動を活発化すべくいろいろな案を提示したが、サークルの主要メンバーの北江さんたちは、「何でそんなことやらななきゃいけないんだ」と無言で拒否

の意志を示していた。修司はこの人たちとつきあううちに、囲碁サークルの活動を活発化させるためには、自分からサークルを引っ張っていかなければいけないだろうと悟るようになっていた。

そして修司は公民館に来る地域の子供を対象に囲碁講座を開く企画を実行しようとした。もちろん北江さんたちのバックアップは得られない、修司は企画に賛同してくれた数少ない仲間たちと共にこのイベントを成功させるための活動をはじめた。

今日の用事は、プロの棋士の人と面会して、講師を担当してくれないか願い込むつもりで都心のほうに向かったものだった。プロの人が参加するとなればサークルの人間も、企画に参加する子供た

ちも興味を引かれるのではないかと思つたのだ。修司は都心の一角にある部屋で数時間待たされて、ようやくその棋士の人と面会できたが、その棋士の人は忙しいことを理由に、修司の誘いを断つた。修司にとって、棋士の人がきちんと顔を合わせてそのことを告げてくれたのはわずかな救いだつた。そしていまだ囲碁サークルは講座を開くための公民館の会場の予約さえ取れずにいた。修司はバスの中で失意に落ちていた。

（このイベントも失敗に終わるのか、俺の生き生きとした老後の人生という虚構は、もう崩れはじめているのだろうか……）

修司が窓の外を流れ行く景色をぼんやりと眺めていると、バスはスピードを落として停留所に止まる。乗客は席を立つと前方からぞろぞろと降りて

いった。修司はため息をついて目を閉じた。

（好きな仕事を前に一緒に闘ってくれる仲間たちがいた会社人生が懐かしい。あの頃にはもう戻れないのだな……）

修司は目を開けて顔を上げる。すると修司の目にある人の姿が飛び込んできた。

（そんな、ばかな……！）

後部のドアの奥からバスの中に入ってきたのは修司の妻の姿だった。

（いや、何かの間違いだ！ そんなはずはない——）

修司の妻は既に他界していた。もちろんバスになど乗ってくるはずもない。

（もう死んでいるのだから、妻がいるはずはない。これは他人の空似だろう、おちつけ、落ち着くんだ、私）

修司の妻にそっくりのその人は修司が座っている後部座席の二つ前の席に座った。向こうは修司の動揺した表情はおろか、その姿にさえ気づいていないようだった。

そう、その人はとても似ていた

顔、目尻のしわ、髪の毛のクセ、体格、着ている服のテイスト、そしてイスに座るときの仕草まで、紛れもなく修司の妻そっくりだった。違うと  
言えば、多少若いと言うことだけだろうか。

バスはまた発車する。修司はバスに乗っている間、ずっと動揺を隠せなかった。他人だと分かっている間、ついつい目がその人の姿に行ってしまう。結局修司はバスに乗っている間ずっとソワソ



ワしたまま、その驚きで今日の自分の気落ちの理由さえ忘れていた。

バスがしばらく走った後、女性は目的の停留所についたらしく席を立つ。そしてその時はじめて修司の視線に気がついた。目があつた修司は一瞬固まる。しかし、その時女性はなんと修司のほうを見て戸惑いがちに「微笑んだ」。修司の方は驚いて、しばしの間あつけにとられていたが、しかし、女性はそのままバスの前のほうに歩いていくと、バスから降りてしまった。

その女性が降りた停留所からしばらく経って、修司もバスを降りる。そして家までの上り坂を歩きながら、妻が昔言った言葉を思い出していた。

妻の名前は千春。もうずっとずっと前、学生時代の頃に知り合ってつきあい始め、卒業と同時に結婚した。料理が得意で、千春の作る豚の角煮は絶品だった。いつも温かく見まもってくれ、必要なときには修司の背中を押してくれた。修司はその頃会社の仕事で悩んでいた。

その納期目標では達成できないと修司が言ったのに上司の一言で納期目標が短縮され、結局間に合わずに会社に損害が出る。そして新製品の開発をしたいのに、製造部門はやる気なしで、どこもラインを動かしてくれない。修司がついそのことを愚痴ったときに千春はこういったのだ。

「そりやうまくいかないことだつてあるわよ。どうにもならないこともある。でもどうにかなることもあるでしょ。そういうことを抜け目なくやつ

ていれば、いつかうまくいかなかったこともうまくいくようになるんじゃない？——つてこれ、学生時代の頃のあなたの口癖だったじゃない」

修司はその時玄関で靴べらを持ってあつけにとられていたが

「そうだ、そうだよな——」

その千春の一言で吹っ切れて、仕事も出来ることからやっていこうと覚悟を決めた。千春はその後、女性のほうが長生きするという日本人の傾向に反して、ひた才で死んだ。老後の生活をどうしようかと、二人で構想をふくらませていたときだった。妻が亡くなったときに、こどもから「うちの世話になったら」とも聞かれたが、修司は住み慣れた家で暮らしていくことを決めていた。

その家が近づいてくる。修司の頭にはその時、あ

る考えが湧いていた。

（またくだらないことでへこんでいる俺の様子を見て、千春はあの言葉を思い出させるために、人の姿を借りて俺の前に現れてくれたんだ。俺は一体、何をくよくよとしてるんだろう。）

見上げると光害の空の中、星が輝いている。そしてそのとき修司のケータイに電話が入った。

「——うん、ああ、わかった。よかった。よし、頑張ろう！」

それは修司の仲間からの連絡だった。子供囲碁講座を開催するための公民館の会場の予約が取れたとの知らせだ。他団体の予約にキャンセルが入り、そこに入れてくれるというのだ。修司はホッと息を吐いた。そして見上げると修司の目に自分の家が入ってくる。そう、千春とずっと暮らしてきた家だ。

修司は最後の坂道をゆっくりと踏みしめながら登っていった。すべては、まだこれからじゃないか——。

■ (2008.9.14)

(c) Whitecaps 2008 All

Rights Reserved.